



TITLE:

## ロック経験哲学の構造(二)

AUTHOR(S):

平井, 俊彦

---

CITATION:

平井, 俊彦. ロック経験哲学の構造(二). 経済論叢 1963, 92(5): 301-317

ISSUE DATE:

1963-11

URL:

<https://doi.org/10.14989/132972>

RIGHT:

# 經濟論叢

第九十二卷 第五號

---

- 一八九〇年代ロシア資本  
主義論争の特徴と背景……………田 中 真 晴 1
- ロック經驗哲学の構造 (二)……………平 井 俊 彦 21
- 日本における金本位制の成立 (2)……………小 野 一 一 郎 38
- 明治三十二年所得税法と  
減価償却會計(その二)……………高 寺 貞 男 58
- 

昭和三十八年十一月

京都大學經濟學會

# ロ ッ ク 経 験 哲 学 の 構 造 (二)

平 井 俊 彦

## 三 経験哲学の立場

ロックは『人間悟性論』をはじめに於て、理論的原理から実践的原理さらには神の観念にいたるまで、すべての生得観念を否定した<sup>1)</sup>。どのような観念ではあれ、人間の悟性の証明をうけないかぎり、真理として確証されはしない。デカルトのように、せつかくスコラ的實在性にたいして近代認識論のメスをふるいながら、道徳律や神についての観念を、直証によつて確実なものとして理性の審判の範圍のそとにおくならば、既成観念や既成体制を承認することにならないであろうか。事実、デカルトの先験的な神の實在性は、旧い神の観念と結びつくことになった。これに對して、ロックはすべての観念の先験性を排し、これを人間悟性の経験のうちに導き入れるのである。もつとも、ロックはすべて感覺的経験から一步一步と観念をつみ重ねて、神の観念にまで到達するわけではない。ロックもデカルトと同じく神の観念を直観的に確実なものであると考へてゐるむきもある。「提言されたことが、共通の経験や事物の正常な経過に一致してもいなくても、單なる証言によつて、われわれの最高度の同意を要求するような一種の命題がある。その理由は、その証言が欺むくことも欺むかれることもありえないようなもの、

すなわち神そのものによるものだから ということである。これは疑いを超えた保証 assurance、異議をいれない明証 evidence をもつものである。これは啓示 revelation という特有の名前で呼ばれ、それに対するわれわれの同意 assent は、信仰 faith と呼ばれる」この文章をみると、ロックは共通の経験を超えた先験的な啓示を承認しており、先のデカルトの先験的な神の観念とおなじもののように見える。事実、ユアロンはロックの知識の確実性の一つの段階たる直観は、デカルトのそれであるとさえのべている。また、ロックの『人間悟性論』のなかには、多様な要素が入り混ついていて、その経験哲学の性格をきわめて複雑なものとしていることは、たしかである。だが、われわれはここでこの問題に詳しく立ちいるわけにはいかない。このことは、ロックの思想体系全体をとりあつかうなかで、あきらかとなるだろう。

ところで、ロックの経験哲学の立場はなんであらうか。すでに、のべたように、ロックは道徳律や自然法を論ずるばあい、まずこれを認識する人間悟性そのものの構造をあきらかにしなければならぬことを悟った。人間の内的世界である悟性そのものを対象とすることは、きわめて技術と労働を要する仕事であるが、それは同時に「飢者の喜び」であり、人間の本性にふさわしい営みであらう。ロックは人間の知性に限りない信頼をおき、その知的可能性を探究しようとするのだが、これは知性の絶対性を意味するものではない。悟性をあきらかにすることは、同時にその働きの限界を確かめることである。ロックは認識批判を試みるカントのような口調で、つぎのようについて「悟性の諸能力を発見し、その能力がどこまで達し、どのようなものにある程度まで適合するか、また、どこでそれはわれわれの役に立たないかを、私が見いだすことができるならば、この研究はひとつにつきのことを納得させるのに役立つと思う。すなわち、人間のいそがしい心がその理解力を越えることがらにかかわるときは、もつと用心

深くしなければならぬ、そして心のおよぶうる最大の範囲のうちに止まるべきであつて、もし吟味の結果、われわれの能力のおよばぬことがわかるようなことがらについては、靜かに無智で安んずること、これである。<sup>4)</sup>

人間が自らの能力である悟性を研究することは、自己の限界を明示することになるが、こうした認識批判こそ近代的人間の自覺、したがってその形成を意味するものであらう。人間悟性はすべてを知るものではないというとき、ここにも、デカルトのいう有限なる人間の知性の自覺と共通するものがみられよう。しかも、ロックにとつてすべてを知ることが問題ではなかった。現実の生活に無縁なものは知るに値しない。われわれの知性は、現実の意味あるものについてののみ有用であり、また働くことができる。それはまさしくスコラ学への挑戦であらう。「われわれの心は、われわれに役立つものについてはきわめて有能であるから、そういうものについて心を用いさえすれば、われわれの心の働きには限りがあるからといって、不平をいう理由はあまりないであらう。<sup>5)</sup>」なぜなら、「神は人間に生活の便宜と道德の知識にとつて必要なすべてのものをあたえ、またこの世の生活に対する快適な用意と、よりよき生活に達する道を人間の見いだしうる範囲内においたからである。」<sup>6)</sup>したがって、「ここにおけるわれわれの仕事は、すべてのことを知ることではなくて、われわれの行為にかかわることを知ることである。」<sup>7)</sup>

このように前提したうえで、ロックは人間悟性の探究に向かうのである。ロックはデカルトの先驗的な人間理性に対して、具体的に直接的な經驗知から出発する。生まれたての人間の悟性はなんらの生得觀念もたず、全くの白紙であるとすれば、悟性は知識をどのようにして得るのであらうか。「一語をもつて、經驗 experience からと答える。この經驗にすべてのわれわれの知識 knowledge は基づくのであり、つまるところ、知識は經驗に由来するのである。」<sup>8)</sup>現実において人間は、身体をもち意識をもつ存在として物と交渉し、その過程のなかで知識を構成

していく。経験するとは「自己が世界において物に会うことであり、世界における一つの出来事である。」<sup>9)</sup>この意味で、経験哲学の立場は歴史的・空間的である。したがって、ここから「歴史的な平明な方法 historical plain method」<sup>10)</sup>によって、「事物について、われわれのもっている観念を、われわれの悟性が獲得する過程」<sup>11)</sup>を探究することになる。

このように、ロックの経験哲学は日常経験の世界のなかで、個々の個人が具体的・現実的にこの世界と交渉するこの現実から出発する。そのかぎり、経験哲学の立場はきわめて現実的・具体的である。デカルトが一切の経験を退け、思惟を徹底させることによって、「思惟する自我」を基礎としたのとは、反対である。デカルトでは、実在が精神と物質とに引きはなされて、それぞれの本性が思惟と延長として独立化されたために、両者の間の通路がとざされてしまった。ことに認識する主体をどこまでも徹底するとき、身体までも主体とは別の原理をもつ物質または自然とみなされ、思惟する自我は感覚から切断された抽象的自我となる。これに反して、ロックはこの現実的環境のなかで具体的に物とかかわりをもつ経験的個人であり、この物と人との関係を基礎としている。そこでは、人間はすでに自然であり、自然としての人間が自然とかかわりをもつのである。とすれば、観念を構成する人間の存在様式は、まず身体をもち感覚する存在であり、このようなものとして自然から作用をうけるというのである。ロックは経験の構造をつぎのように二つに分けている。「まず、第一に個々の感覚的対象 sensible object にかかわるわれわれの感官 sense が、これらの対象が感官に影響するいろいろの方法にしたがって、事物のいろいろの別個の知覚 perception を心に運び入れる。」<sup>12)</sup>身体的自我は五官をもち、視覚で色を、聴覚で音を、触覚で硬さや温度をなど……外界から印象をうける。「われわれのもつ大いの概念のこの偉大な起源は、まったくわれわれの感

官によっており、感官によって悟性にもたらされるから、わたしはこれを感覚 sensation と呼ぶ<sup>13)</sup>。」

このように、まず観念はこの経験的世界では自然と人間とが感官を媒介として出会うことによって成立する。このばあい感覚的人間が自然に対立するとともに、自然をはなれて成立しえないという意味では、経験哲学の立場は主観的・客観的なものであらう。ところで、こうして成立する感覚知は、ヘーゲルがいうように個々の対象において異っており、直接知であり具体的観念である。<sup>14)</sup>だが、われわれは感覚のみによって観念を構成するわけではない。というのも、われわれは精神をもつ存在であり、理性的人間であるからである。「第二に、経験が悟性に観念をあたえるいま一つの起源は、悟性がそのえた観念に関して働くばあいの、われわれ内部における心の作用の知覚 perception of the operations of our own mind within us である。この作用は精神がこれを反省し考察するようにになると、外界の事物からは得られなかったような他の一連の観念を悟性にあたえる。それはすなわち、知覚すること、考えること、疑うこと、信じること、推理すること、知ること、意志すること、およびわれわれの心のすべての異った働きであって、われわれはこれらを意識し、自己のうちにこれらを認めるのであるから、われわれが感官に影響をあたえる物体からうけとるおなじように、明白な観念をこれらの作用から悟性に受けとるのである。」<sup>15)</sup>直接に物とかかわることによって、物から受けとる観念のばあい働くものが「外感 external sense」であるとすれば、このばあい、いわば「内感 internal sense」であり、ロックは「心が自己の内部それ自身の作用を反省する」という意味で、これを「反省 reflexion」<sup>16)</sup>と名づけた。

人間悟性はこの世界のなかで、これら二つの作用、すなわち感覚である外感と反省である内感によって観念をうる。経験とは要するにこうした人間の内外二面の感性 sense の働きによって、知識を構成することにはかならな

い。「すべてのわれわれの観念は、これら二つの起源のうちの一方または他方から生ずる。」<sup>17)</sup>ところで、人間は感覚的経験によって一方で物から作用をうけるときに、他方で理性の作用で自己の心の内部の作用の観念をうるばかり、これら二つはまったく独立した働きであり、ロックはこれら兩者を個別的に並列させている。そこには、ヘーゲルのように感覚的確信、知覚から悟性へ、さらに自己意識である理性へと理論的に精神が展開する道筋があるわけではない。だが、そうだからといって二つの人間の働きはたがいに無関係であるのではない。すでにのべたように、悟性がしだいに単純な観念から複雑な観念へと知識を高めていく段階を追究していくことが、ロックの経験哲学の課題であるとすれば、それは子供が生まれたときから外界の事物と交渉する個人の知的成長になぞらえられるであろう。「子供らは、はじめてこの世界に入ってくるときは、新しい事物の世界で囲まれている。この世界がたえずかれらの感官を刺激することによって、心をつねにこれらの事物にひきつけ、新しいものに注意し、対象がいろいろに変化することを喜ぶ傾向となるように促すのである。このようにして最初の年月は、ふつう外を見ることに用いられ、向けられる。……かれらは外界の感覚にたえず注意して成長するので、かれらがやや成熟期に達するまでは、かれらの内面に生ずることがらについてなんらかの相当の反省をすることは、まれである。」<sup>18)</sup>

この意味では、経験哲学にとっては感覚的経験がより基礎的であり、反省に先行する。感官によって人間が環境から作用をうけるという意味では、人間は受動的であるが、時間的にこれが先行しなければ、なんら理性ははたらない。だが、時間的に先なるものが、かならずしも論理的に基礎的であると考えてはならない。たしかに、ロックは「反省の観念はあとから生ずる」<sup>19)</sup>とし、「知覚は知識への第一歩である」<sup>20)</sup>とみなし、感覚的経験論の伝統をふんではいるのだが、しかし同時にロックは人間固有の能力として、反省によってえられる理性の働きをみとめてお



り、しかも、これを能動的な力とみている。このことがロックのもっとも特徴的な思想的意義なのである。「われわれが自分たちの心のうちに気づくことのできるいま一つの能力 faculty は、心のもつさまざまな観念を判別し discern、また区別する distinguish 能力である。」<sup>21)</sup>このことは、動物にみられない人間の類的本性である。「動物はおそらくじゅうぶん判明ないくつかの観念をもっているが、しかも人間の悟性がある観念をじゅうぶん区別して、これらが別のものであり、したがって二つのものであることを知覚するとき、いかなる事情のもとでこれらの観念は比較されることができるかを考察することは、人間、悟性の特権 prerogative of human understanding である。」<sup>22)</sup>この理性があるためにこそ、ロックは物理的世界からはなれて精神的人間像を確立しえたのである。

知覚と反省とは、ロックの経験哲学を織りなす二つの色模様である。それらはたがいに解けがたく結びあっているのであるが、われわれは一つ一つその糸をたぐりよせて、ロック経験哲学の全体に光をあててみよう。

- (1) ロックが生得観念を否定したからといって、すべての自然の法則を否定しているのではない。このことは、前節注脚と関係している点であって、主観的には感性、客観的には自然の法 *law of nature* をみとめて、つぎのようにいう。「私は自分が生得的法則を否定するからといって、実定法 *positive law* いがいに法はないと考えているのだ」と誤解してもらってはこまる。生得的法則 *innate law* と自然法との間には、大きな相異がある。すなわち、そもそもの初めから心に刻みつけられているものと、いまは知らないけれども、自然の能力を川い、正しく利用すれば知ることのできるものとの間には、大きい相異がある。思うに、阿旗端に走って、生得的法則を肯定する人も、あるいは絶対的啓示なしに自然の光で知ることのできる法があるところとを否定する人も、ともに真理を捨てたものである。」*Locke, J.: An Essay concerning Human Understanding, Vol. 1, p. 78.* 邦訳上杉一之助。

- (2) *Locke, J.: ibid, Vol. 2, p. 283.* 邦訳下、九七ページ。ロックは経験によって一歩一歩と知識をつみかさね、理性の働きですべての実在を証明していくのであるが、第四編の叙述はかなり、それまでのところと趣が異なっている。ことに、この十六

章では、信仰と理性とが対立しているかのようにである。この後で引きつづき、ロックはつぎのようにいう。「信仰はわれわれの知識そのものとおなじく絶対的にわれわれの心を決定し、また完全にすべての惑いを排除する。そしてわれわれは、神からの何らかの啓示が真であるかどうかと疑うことができるくらいなら、我々自身の存在をも疑うことができるのである。だから、信仰は確実な同意と保証の原理であって、疑問または躊躇にたいするいかなる種類の余地をも残さないものである。」そうだとすれば、ロックはデカルトの神の生得観念、さらには、ビュリタン革命諸派の神の観念に近づくことにもなるであろう。ロックには一面でスコットの要素もみられるのである。だがロック自らもこの点を、引きつづき十八章と十九章で分析している。これをあきらかにするためには、同意の理論を解かなければならないが、ここでは前節でのべたように、ロックは信仰は理性に究極的には一致するのだという確信があったというこののみを、結論としてしめすにとどめよう。

(3) Aaron, R. I.: *John Locke*, p. 10.

(4) Locke, J.: *ibid.* Vol. I, p. 28-9. 邦訳上三四ページ。

(5) Locke, J.: *ibid.* Vol. I, p. 29. 邦訳上三五ページ。

(7) Locke, J.: *ibid.* Vol. I, p. 31. 邦訳上三七ページ。ロックはここで、相対的知識に首んじることをのべているのだが、同時に、知識の探究を怠ることをうましめている。

(8) Locke, J.: *ibid.* Vol. I, p. 122. 邦訳上八〇ページ。

(9) 三木清「哲学入門」著作集七巻、二六ページ。わたしは、経験をば、現実の生活のなかでの主体と客体との関係としてとらえる。この点で、「三木哲学における経験把握は教示にとむ。ただ、「経験についての正統的学説すなわちイギリスの経験論の哲学は、経験を心理的なもの、意識のものとみた。すべての経験は主体に関係して経験であるかぎり、そのことはおのずから理山のあることである。」とし、ロックを主観的な経験論とみているが、そしてそのためにひろくわが国の哲学研究がヒュームを経験論の典型とみているが、わたしは、ロックの経験論を単に主観的にみることに反対である。(三木「構想力の論理」第四章経験、二四六ページ以下)。わたしは、ロックにおいても、「経験は、主観的であって客観的なもの、客観的であって主観的なものである」と理解している。このことは、次節であきらかにしよう。

(10) (11) Locke, J.: *ibid.* Vol. I, p. 27. 邦訳上二二ページ。ここで「歴史的とは経験的 empirical」と同義であってデカルトの先

驗的 (transcendental) に対する言葉として用いられている。この箇所に関するフレイザーの注によれば、「歴史的話は、時間と場所を抽象したものを論理的に分析することとは反対に、時間的に生起するものを観察する方法である。」

(12) Locke, J.: *ibid.*, Vol. 1, p. 122-3. 邦訳上八〇ページ。

(13) Hegel, G. W. F.: *Phänomenologie des Geistes*, Philosophische Bibliothek Bd. 114, S. 79. 金子武蔵訳『精神現象学』上、ハーゲル全集四卷「最初によたは直接にわれわれの問題である知は、それ自身、直接的なる知 unmittelbares Wissen」すなわち、直接的なるもの、または有るものの知いがいのものではありえない。感覚的確信 Sinnliche Gewissheit は、その内容が具体的であるために、「一見すると、もっとも豊かなる認識であるかのように、におもわれる。」「わたしはここで、ロックがクーゲルと論理的に同じであるといっているのではないことは、のちに明らかとなるだろう。」

(14) Locke, J.: *ibid.*, Vol. 1, p. 123-4. 邦訳上八〇—一ページ。

(15) Locke, J.: *ibid.*, Vol. 1, p. 124. 邦訳上八二ページ。

(16) Locke, J.: *ibid.*, Vol. 1, p. 126-7. 邦訳上八五ページ。

(17) Locke, J.: *ibid.*, Vol. 1, p. 126. 邦訳上八五ページ。

(18) Locke, J.: *ibid.*, Vol. 1, p. 191. 邦訳上一三六ページ。ロックはつづいて「知覚は、知識のすべての材料の入口である」とのべている。

のべている。

(19) Locke, J.: *ibid.*, Vol. 1, p. 202. 邦訳上一四七ページ。

(20) Locke, J.: *ibid.*, Vol. 1, p. 204-5. 邦訳上「四九ページ」。

#### 四 感覚的経験——ホッブズとロック

ロックの経験哲学は、人間がなんらの生得概念もなく白紙でこの世界に生まれ、この経験的世界のなかで現実と交渉することによってしだいに観念を構成する過程を追究するのである。経験哲学の立場では、デカルトのように精神と自然とはっきり区別し、その先験的原理を究明するのとは反対に、この自然のなかで人間が環境とかかわ

り、両者の関係を問題としていく。したがって、人間は自然から切りはなされないし、また人間不在の自然もない。両者は結びついているという意味で、その立場は主観的・客観的なものである。そして、この立場に立てば当然のことであるが、まず人間は感覚をもった身体的存在としてあらわれ、感官によって物体から作用をうけるものと考へられている。生まれながらにしてなんらの既成観念をもたないのなら、個人がこの現実のなかで自ら観念を構成するほかには、知識をうる道はないのである。では、どのように人間は感官を媒介として自然とかかわるのであるか。

ところで、こうした感覚論はなにもロックに固有なものではなく、すでにホッブズのなかにもみられるのであって、これはイギリス経験論哲学に一貫した考え方であろう<sup>1)</sup>。ホッブズは『リヴァイアサン』のなかで、思考 *thought* の起源を感覚 *sense* とみて、つぎのようにいう。「個別的には、思考はそれぞれ、われわれの外部の物体のある質またはその他の偶有性の表象ないし現象である。この物体はふつう対象と呼ばれる。この対象は目や耳やその他の人体の諸部分に作用して、さまざまな作用によって、さまざまな現象を生みだすのである。すべての思考の根源は、われわれが感覚と呼ぶものである。残余のものは、この根源から引きだされるのである。」<sup>2)</sup>とところで、人間が感覚をとおして物にかかわり、この物から作用を受けるといえるとき、感覚的经验は対象から限定されるといえる意味では、受動的 *Passive* である。「感覚の原因は、外的物体すなわち対象であって、それはそれぞれの感覚に固有の機関を、味覚や触覚におけるように直接に、あるいは視覚や聴覚や嗅覚におけるように間接に圧迫する。この圧力は、神経やその他の筋や身体の薄膜の媒介によって、内部に伝わって頭脳と心臓にいたり、そこに抵抗、反対圧迫すなわち自らを解放しようとする心の努力を生ぜしめる。この努力は、外部へ向かっているので、なにか外部的

本物質のようにみえる。そしてこの外観すなわち想像が、いわゆる感覚なのである。<sup>3)</sup>すでにのべたように、感覚的経験によつて人間が自然から作用をうけとるという点では、ロックもホッブズとなんらかわらない。観念の起源は、ロックにおいても感官である。「感官がなんらかの観念を運び入れるまでは、心のうちになんらの観念もないようにおもわれる。」<sup>4)</sup>のみならず、この感官の働きによつて、観念のあり方は決定されるのである。「知覚は知識への第一歩であるから、ある人またはその他のある生物がもつ感官が少ければ少いほど、またこれらの感官で作られる印象が鈍いほど、……それだけかれらはいくらかの人々に見いだされる知識に遠ざかっているのである。」<sup>5)</sup>

このようにみると、イギリスの感覚的経験論では、自然が人間に作用をあたえるものと考えられている。というよりは、人間は感覚をもつた身体的存在とみられており、いわば人間もまた自然である。したがつて、人間は自然においてあり、そこから引きはなせない存在である。<sup>6)</sup>ここから、つぎのようにいわれる。イギリスの経験論は、「経験の根柢に自然という思想をもっていた。すなわち、経験からわれわれのすべての知識が発するのではなく、自然のもっている法則のなかで経験が考えられたのであつて、経験は一つの自然現象であつた。したがつて経験は、自然という理性的な合理的な根柢をうちにふくんでいたのである。」<sup>7)</sup>しかも、この自然のなかにある人間は感覚的存在であり、感官において人間と自然とが結びついているばあい、この感覚論において、自然から感覚がみちびきだされ、この感覚の合理性がとわれるのである。実に、十七世紀において確立される感覚的人間像は、十八世紀のイギリス啓蒙思想へと継承されるのである。

ところで、感覚的経験によつて人間が自然の作用をうけとるといっても、それらのかかわり方はけつして単純なものではなく、ホッブズとロックとはかなりのちがひがある。ホッブズでは、自然的世界の法則がそのまま人間

の世界に投影される。というよりは、人間は自然とおなじく一つの物体であり、感覚の対象たる物体の本性が同時にその作用を受けるとる感覚そのものの本性でもある。「すべて感覚しうる *sensible* とよばれる性質は、それを生ぜしめる対象のなかにあるのだが、物質のそれだけさまざまな運動 *motion* にはかならず、それらの運動によって、対象がわれわれの諸機関をさまざまな圧迫するのである。圧力をくわえられたわれわれの内部においても、それらはさまざまな運動がいのあるものではない(運動は運動がいのあるものを生まぬからである。)<sup>8)</sup>」もとより、ホッブズにしても、物理的世界の運動がそのまま人間の本性を貫徹しているわけではない。<sup>9)</sup>たとえば、自然状態の人間と国家社会のそれとの間には、なにがしかの差異はみとめられよう。だが、すくなくとも自然状態において、ホッブズの人間の本性は物体の運動になぞらえられる。「力の性質は、名声に似ていて、進行するにつれて増大するものであり、あるいは進めば進むほどますます速くなり、重い物体の運動に似ている。」<sup>10)</sup>さらに、この力が合成されれば、リヴァイアサンの国家社会の力をすら生みだすものである。「人間的な力のうちで最大のものは、できるだけ多くの人々の力の合成であつて、それらの力は、同意によつて自然的または社会的な、人格に合一される」<sup>11)</sup>のである。

ホッブズの感覚論では、あきらかに物体の実在性が承認されており、その本性から人間の本性も導き出される。

そこでは人間像は、どこまでも唯物論的であろう。ロックも感覚的経験においては、この物体それ自体の実在性をみとめている点では、十八世紀のイギリス経験論哲学からみて、不徹底であるとみられよう。なぜなら、ロック以後の経験論哲学の展開は物質の実在性の消失する過程と考えられるからである。すでに、バークリーでは、「事物が存在するとは、知覚されることである。すなわち、そうした事物が心のそとで、つまりそれらを知覚するところの思考するもののそとで、かりそめにも存在することは不可能である」<sup>12)</sup>「バークリーでは、物体は意識のことから

となる。ところがロックでは、知覚は物体から説明されている。意識が働くのは感官をとおして物体が働くからである。観念を心に生ぜしめる物体の力を、ロックは「物体の性質 quality of the body」と呼んでいる。「物体のなかに考察される性質は、まず第一に、物体がいかなる状態にあらうとも、物体からまったく引きはなすことのできないようなものである。」<sup>13)</sup>これは、「物体の圓形的部分の大きさ、形態、数、位置および運動または静止である。これらのものは、われわれが知覚しようといなとにかかわらず、物体のなかにある。」<sup>14)</sup>この性質は、人間の知覚いかににかかわらず存在するという意味で、いわば物体の「本来的性質 original quality」または「第一性質 first quality」である。そして、この物体の力は人間に衝撃をあたえて、感覺的観念を作るのであり、そこでは人間の感覺はこの物体の作用をうけとる受動物にすぎない。

ところで、このようにみると、たしかにロックはホッブズとおなじく、物質的実在から意識を説明しようとするかのようにみえる。しかし、ホッブズは物理的世界を運動としてとらえ、これを徹底させたのだが、ロックは実在の世界そのものへ立ちいろうとはしない。この点では、ロックの思想のなかで、自然哲学の地位を過重に評価することはできない。物体の「第一性質」についても、それは物体の変化しない性質であって、「分割しても同一の性質をもつもの」とのみふれられているにすぎない。というのも、ロックにとって物体は、やはり感覚にかかわつてのみ意味があるのであり、またそれに即して物体が考えられているからである。このことから、ロックは「物体の性質」のうち「第二性質 second quality」を導き出す。「炎は熱く明るい、雪は白く冷たい、甘露蜜は白く甘い、というようにいわれるのは、これらの物がわれわれのうちに生ずる観念による。」<sup>15)</sup>したがってこの物体の性質は、物体そのものの中にはあるが、感官のあるものに作用することによってのみ、「いろいろな色、音、味などのさま

さまざまな観念をわれわれのうちに生ずる」、いわば「感覚的性質 *sensible quality*」であらう。したがって、この第二性質は物体から感官へ、そして再び物体へというように、人間の感官を媒介としてはじめてその性質を規定できるようなものである。いわばこの物体は、人間の感覚の媒介によつてはじめて物体となるものであり、それなしには成立しえない性質である。この側面は、パークリーからヒュームへと展開する主観的经验論への萌芽ともいえるのであつて、ロックはこの意味でも、ホップズからヒュームへの中点に立っているのである。

このように、ロックが物体の性質を第一性質と第二性質に区別するとき、その力点はいうまでもなく、この第二性質にあるのである。というよりは、すでにこれを区別すること自体、感覚を基準にして物体を考えているのである。ここに、ロックの経験的な自然哲学の性格がみられ、エアロンもこれをロバート・ボイルからの影響によるとのべている。<sup>17)</sup> ロックの経験哲学における物体と感覚との関係は、きわめて相対的であり、流動的である。すなわち、おなじく火という物体の性質を考察しても、「ある距離において、われわれのうちに温いという感覚を生ずる火が、より近くではこれとはまるでちがった苦痛の観念を生ずる」<sup>18)</sup>であらう。また、感覚そのものが変化すれば、物体の性質そのものが変化する。ロックは「実在に関する複雑観念」の章で、つぎのようにのべている。「もしわれわれが、諸物体の微細な諸部分、およびその感知できる諸性質の基礎にある実際の構成を識別するにじゅうぶん鋭敏な感覚をもつていたならば、たしかにこれらの感覚はわれわれのうちにまるでちがった観念を生ずるであらうし、またいまは金の黄金であるものはそのときには消えて、そのかわりにわれわれは一定の大きさと形をした諸部分のすばらしい組織をみるであらう。このことは顕微鏡をみればあきらかになるのであつて、顕微鏡でわれわれの感覚が鋭くなれば、いままで肉眼にはある色にみえていたものが、まったく別のものであることが、わかるの



である」<sup>618)</sup>

もとより、ロックにとつても物理的世界はそれ自体において人間の感覚や意識にかかわりなく存在する実在であり、この物体に内在する力が人間の感覚に働いて一つの観念を生ぜしめるものであった。物体の第二性質においてすら、物体は能動的であり、人間はその作用をうける受動的なものであつて、このかぎり感覚的経験において人間の能動性はみとめられない。だが、ロックの経験哲学においては、人間が自然と出合うところで生ずるのであり、そのなかで観念を構成するかぎりでは、自然は感覚をはなれてはなく、それはどこまでも感覚的自然なのである。ことに、物体の第二性質においてはそうであつた。だとすれば、すでにロックの感覚的経験のなかでは、人間は自然を媒介として感覚的となるとともに、その反面で自然もまた人間の感覚を媒介として経験化される、といえはしないだろうか。

(1) Aaron, R. I.: *John Locke*, p. 31. エプロンはロックの感覚的経験論は、ホッブズの系流ではなく、むしろデカルトに対立したフランスの感覚論者ガッサンディに基づいていることを、つぎのように主張している。「ガッサンディがロックやこの時代のイギリスの思想家たちと与えた影響は、不思議にも無視されているようである。だが、その当時のロックは、ほかならぬライプニッツによつて、ガッサンディストだとみなされた」。そして、「ホッブズのロックに対する影響は根本的には否定的なものである」(ibid., p. 30) とすらのべている。ガッサンディ Pierre Cassendi (1592-1655) は『哲学集成 *Synagoga philosophicum*, 1658』のなかで、「あらかじめ、感覚にないものは、なんら知性のうちにはなく。Nihil est in intellectu quod non prius fuerit in sensu.」という有名なテーゼを述べ、「心にあるすべての観念は感覚に由来する」とのべている。そして、ロックは「六七五年の第二回日のフランス訪問のとき、ガッサンディストの当時の指導者ベルニエ François Bernier (1625-1688) と交渉があつた。さらに、ロック自身も諸著作のなかで、ホッブズおよびホッブズ主義を批判している。だが、こうしたことがみとめられても、ロックが単にガッサンディから影響をうけたとしても、それではフランスの主観的経験論とロ

マックを同じものと解するわけにはいかない。わたしは単にガッサンディからコンディヤック (1715-80) のフランス感覚論の流れに、ロックをおくことには、疑問をいだいている。

- (2) Hobbes, Thomas: *Leviathan, or the Matter, Forme and Power of a Commonwealth ecclesiastical and civil*. Edited by M. Oakshott, p. 7. 水田洋訳『リヴァイアサン』岩波文庫四三二頁。

- (3) Hobbes, T.: *ibid.*, p. 7. 邦訳四四二頁。

- (4) Locke, J.: *An Essay concerning Human Understanding*, Vol. 1, p. 141. 邦訳上九二二頁。

- (5) Locke, J.: *ibid.*, Vol. 1, p. 191. 邦訳上二六六頁。

- (6) 太田可夫『イギリス社会哲学の成立』六二頁。太田教授は、イギリス経験論をドイツ観念論と対比させて、つぎのように特色づけている。「ドイツ観念論では、人間は自然とは別な原理として、認識論的に主観と客観との対立が作り出され、主観は客観を構成するというカント哲学の最高原理が生まれる。ア・プリオリの概念はこの点から理解できる。これにたいしイギリス経験論においては、人間は自然の作用によって感覚をえ、観念をうると考えられる。したがって認識の問題は、観念と観念との関係として考えられる。主観と客観との対立はない。人間と外界との関係は、けっして主観と客観との対立ではなく、まして原理的超越をふくむ認識論的關係ではない。それは運動に媒介される連続的關係である(この運動の概念は、ホッブズについてあてはまるものである——引用者)。この点から、すべての認識が経験的であることが確立され、その理論的性格が経験論的であるといわれるのである。」たしかに、イギリス経験論では、ドイツ流の人間と物質との対立はない。だが、ことにロックにおいては物理的世界と精神的世界との断絶がある。それはホッブズのばあいのような連続的なものではない。この点は、のちにふれるつもりである。

- (7) 太田可夫「ジョン・ロック」『自由主義思想十講』二四二頁。

- (8) Hobbes, T.: *ibid.*, p. 7-8. 邦訳四四二頁。

- (9) 水田洋『近代人の形成』一〇七頁以下。

- (10) Hobbes, T.: *ibid.*, p. 53. 邦訳一四五二頁。これは、どうも多少なく加減度の原理にほかならなう。

- (11) Berkeley, George: *A Treatise concerning the Principles of Human Knowledge*. Wherein the chief causes of error

and difficulty in the Sciences, with the grounds of Scepticism, Atheism, and Irreligion, are inquired into. 大観泰  
彦訳『人知原理論』岩波文庫四五ページ。

(13) Locke, J.: *ibid.*, Vol. 1, p. 169. 邦訳上二一八ページ。

(14) Locke, J.: *ibid.*, Vol. 1, p. 178. 邦訳上二二六ページ。ロックは物体の第一性質のなかでことに固体性 solidity をあげており、これに対応する感覚が触覚 feeling であることは、興味ぶかい。この点は、デカルトが物体の本性を延長としたことへのロックの反対とも関係している。「固体性は、物体とは不可分離の観念であって、物体が空間を充たすこと、その接触、衝撃、および衝撃による運動の伝達はこの観念によるものである。」Locke: *ibid.*, Vol. 1, p. 226. 邦訳上二六九ページ。

(15) Locke, J.: *ibid.*, Vol. 1, p. 173-4. 邦訳上二二三ページ。

(16) Locke, J.: *ibid.*, Vol. 1, p. 179. 邦訳上二二六ページ。

(17) Aaron, R. I.: *ibid.*, p. 14. エブロンは、ロックの自然哲学の多くが、「ボイルの終極である」と、ここに物体の第一性質と第二性質の区別は、「ボイルのそれである」とのべている。「ボイルの著書『形式と質の起源』The Origins of Forms and Qualities, according to Corpuscular Philosophy, は、『ボイルとロックの共同の仕事が』とも緊密に結びなわけていた一六六六年に出版されたものだが、『この書物の序文のなかで、ボイルはたしかに、自然哲学に関する『悟性論』の中心となるテーゼを総括したものである。』をして、『ボイル自身の次のことはが引かれている。『われわれが物体についてもっている知識についていえば、その大部分は心が感覚によって受けとる知覚からもたらされるものであるから、物体の性質をのぞいては、物体がわれわれの感覚に作用しうるもののほかは、物体のなかにみとめられない。』」

(18) Locke, J.: *ibid.*, Vol. 1, p. 174. 邦訳上二二三ページ。

(19) Locke, J.: *ibid.*, Vol. 1, p. 401. 邦訳上二六八ページ。